

1

次の各文の――線を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 感覚を研ぎ澄はます。
- (2) 落とした物を血眼はになって探す。
- (3) 民主主義を鼓吹はする。
- (4) 荷物運びの助太刀はを頼む。
- (5) 順風満帆はの人生を送った。

2

次の各文の――線を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 主役が満みをジじして登場した。
- (2) 行事の準備にヨネンよがない。
- (3) 監督のキヨシュウきが注目される。
- (4) ボツカテキはな風景が広がる。
- (5) リガイトクシツりにとらわれないで決める。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

大学生の「僕」はアルバイト先で水墨画の大家である篠田湖山と偶然に
出会い、弟子入りすることになる。湖山のもとでは孫の千瑛や齊藤さん、
西濱さんらの弟子たちが技を磨いていた。

千瑛は緊張した面持ちで、湖山先生を見、齊藤さんもふだんにはない
険しい目で湖山先生を見たが、当の湖山先生は千瑛の絵を見たまま、な
んてこともない白けた目をしている。

空気が凍り付くようなこの緊張感は何なのだろうか？

あの好々爺（きょうこうや）そのものとも思えるような湖山先生が冷たい目を見ると、
こんなにも怖いものなのだろうか。

湖山先生は何も言わないまま首を振った。そのとき、千瑛の顔にはう
つむきながら暗い影が広がった。齊藤さんの表情も渋くなった。湖山先
生はなお何も言わない。齊藤さんは心からこわごとと湖山先生に訊ね
た。

「先生、いかがでしょうか？良い絵だったと思いますが……。」

齊藤さんがそう言った後、しばらく湖山先生は答えなかった。その間
が、あまりにも怖い。

「齊藤君は、今のが、いい絵だったと思うのかね？」

その声も問い方もあまりにも厳しくて怖かった。千瑛はいつものよう
な跳ねっ返りを口にすることもなく、齊藤さんでさえ押しつぶされそう
だ。湖山先生は、これぞ篠田湖山！というような誰もが安直に思い描い
てしまう大家の、あの表情で話をしている。文句をいうわけでも、不機
嫌そうなのでもないが、何かどうやっても曲げられないような強い意
志が、言葉にも雰囲気にも表れている。湖山先生を支えてきた巨大な精

神力の前に、僕ですら息苦しくなってしまった。齊藤さんは何も答えら
れない。湖山先生は、

「齊藤君、描いてみなさい。」

と、言い放った。齊藤さんの動きは固まったが、その後、意を決した
ようにうなずいて、別室に道具を取りに行行って戻ってきた。

「では……。」

と、千瑛といっしょに紙を用意し、千瑛の使っていた道具や筆を退け
て自分の道具を並べ始めた。筆洗の水はすぐに千瑛が換えてきた。

ポチャんと、いつもの音がすると、齊藤さんは絵を描き始めた。

千瑛のように揺れはしない。だが、無駄な筆致も少なく、墨の濃度の
調整もいつものように狂いが無い。調墨だけでいえば、確かに千瑛の数
段上を行っている。千瑛の絵もそれを眺めたときはみごとだと思っただ
れど、齊藤さんを前にするとやはり未熟さが目立ってしまう。まるで狂
いのない筆致に僕は驚いていた。齊藤さんの手は機械のように精密に動
いていた。

大筆で画面に叩き付けるように調墨をした筆の全体を使って花びらを
描いていき、叩き付けた衝撃で花弁の繊維を描く。その繊維は、当然、
筆の毛が画面に乗った際の繊維だが、筆の中に含まれた墨の達人級のグ
ラデーションが、まるでそれを輝きや潤いのある花びらそのものに見せ
てしまう。

齊藤さんの手順は、徹底して無駄がなく美しい。迷うことなく同じリ
ズムで進み続ける作画は、齊藤さんがそれを身につけるまでに費やした
膨大な時間を思わせた。

出来上がった絵は、この前見たときのように完成度が高く、この前と
同じようにCG（コンピュータグラフィックス）のようだった。

同じ墨を使っているのに、薄墨（うすずみ）と濃墨（こずみ）の差が千瑛の絵よりも広がって
いるために、絵そのものが光を帯びているようにも感じた。明らかに目

を引く美しさがあつた。そして、何よりも千瑛のものよりもさらに写実的で、形に狂いがなかった。傍目^{はだめ}で見えていても、絵ではなく写真のように描かれる画面は技術というよりも魔術に近い。何か騙^{だま}されたような気さえしてしまう。

これならばと思い、湖山先生の顔をのぞいてみるけれど、湖山先生の表情は相変わらず冷めている。斉藤さんが、筆を置いて、湖山先生を見ると、湖山先生は疲れたように目頭を押さえて、それからゆっくり首を振った。

斉藤さんのこれ以上、青くなりような顔がさらに青ざめているのを見ると、心から不吉な感じがした。千瑛はその背後で、もうすぐ泣きそうだ。このときだけは、千瑛は弱々しい小さな女の子のように見えた。湖山先生の静かなため息が聞こえて、一同が言葉を失^なくしているところ、

「お待たせしましたー！」

という、いつもの軽いノリで西濱さんがお茶を運んできた。手際^{てぎわ}よく、皆にお茶を配ると、斉藤さんと千瑛と僕を席に着かせた。ナイスタイミングだとも言えるし、ちよつと間が悪すぎるともいえる微妙な瞬間に西濱さんはやってきて、何もかもを小休止させてしまった。湖山先生は、西濱さんを見るとちよつと微笑^{ほほえ}んで、

「西濱君、ありがとう。」

と、いつもの好々爺にわずかに戻り、⁽¹⁾千瑛はお茶を飲みながら熱くなった瞳を冷ましていた。斉藤さんだけが元のまま青く、お茶にも口をつけない。僕は緊張でカラカラになった喉を潤していた。当の西濱さんは、頭からタオルを取って、僕の横に座ってズズズとお茶を啜^{すす}っていた。⁽²⁾この沈黙に響く、なかなかいい音だった。

「悪くない。」

と湖山先生は言ったが、それは明らかにお茶のことだろう。

「美味しいですよね。」

と西濱さんが、声を上げて、湖山先生が、

「これは何処^{どこ}のお茶？」

と子供のように訊ねると、ほとんど機嫌はなおっていた。西濱さんは、「今日の帰りに、^{*すいご}翠山先生のところの茜^{あかね}さんが持たせてくれたんですよ。お裾分けだそうです。翠山先生のところの息子さんがほら……。」

「ああ、翠山先生のところのお婿さんかあ。そういえば、お茶屋さんの工場に勤めておられるんだよね。」

「そうそう。茜さんのお父さんです。湖山先生にとって新茶を持ってきてくれていたみたいですよ。」

「なるほどね。翠山先生の家にはいつもお世話になるねえ……。西濱君、翠山先生のところにはよくよくお礼を言っておいてね。審査でもいつも助けられてるし。」

「もちろんですよ、先生。翠山先生にも茜さんにもまたお礼を伝えておきます。」

「うんうん。」

と湖山先生はうなずき、さつきまでの不機嫌さは何だったのだろう、というような不思議な和やかさに包まれて話が進んでいたところで、斉藤さんが声を上げた。声は緊張で震えている。

「せ、先生、わ、私の絵は……。」

⁽³⁾それは場を締め上げるような苦しい声だった。

湖山先生は、ハッと気づいたように、元の厳しい顔に戻って、斉藤さんと千瑛を見た。二枚の絵はテーブルに隣り合って並べられている。同じ構図で雰囲気がよく似ている。斉藤さんのほうは完成度が高く、千瑛のほうが情熱的だ。二枚とも僕にはすばらしい絵に見える。湖山先生は何が気に入らないのだろう。湖山先生は大きくまばたきして、ため息をついてから、

「西濱君。」

とそれだけ言った。西濱さんは茶碗から口を離し、ハツとしたように顔を上げた。きつとさっきの一瞬は、黙って茜さんのことを考えていたのだ。茜さんの話が出たから、茜さんのことを考え続けているなんて、なんでそんなに単純なんだ、と思ったけれど、この柔らかなところに今は救われていた。

「西濱君。」

ともう一度、穏やかに湖山先生は言つて、西濱さんは、ああはいはい、と立ち上がった。

斉藤さんと千瑛の絵の前に立つと何を言うことも、思うこともなさそうに、そのまま筆を取った。

「千瑛ちゃん、これ借りていいかな？」

声を掛けると、千瑛は、どうぞとうなずいた。西濱さんは当たり前のように微笑んだ。良いお兄ちゃんという表情だ。描き始める前に、何かに気づいたようにもう一度筆を置いて、墨をすつて、それからいつも着ている作業着の上着を脱いだ。たぶんいつでもタバコを胸ポケットに入れているから、上着を着ているのだろう。西濱さんの上着はいつでも汚れていて、ところどころ泥んこだ。だが、それを脱ぐと、隆々とした引き締まった体や長い腕が長袖のTシャツ越しに現れた。工務店のお兄ちゃんが水墨画家に変身した瞬間だった。

「では、あらためて筆をお借りして。」

と描き始めようとしたところで、斉藤さんは気づいたように紙を取り換えて、西濱さんの前に置いた。

「斉ちゃん、ありがとう。」

と穏やかに言った後、西濱さんは一気呵成に描き始めた。

速い。

千瑛も速いが、それよりもさらに速い。そして、速いのには余裕があり

落ち着いている。千瑛がヴァイオリンのように筆を小刻みに身体を揺らしながら使うのだとすれば、西濱さんはコントラバスか、チェロのような大らかな動きで身体を使っている。筆の先は、速いが、落ち着いている。そして、画面の部分によつて速く運筆する場所とゆったりと運筆している場所の差が大きい。大柄な体軀から生まれる生命力をそのまま筆に込めている印象があった。描かれている絵は美しい。それは当然のことだった。

だがそれだけではない。千瑛や斉藤さんの絵とは本質的に異なっている。それは美ではない何か、だ。

僕の目は画面に吸い込まれて、それと同時に、僕は自分の心の内側にあるガラス部屋まで意識した。その場所と外の世界が繋がり、そこから僕は西濱さんの水墨を眺めていた。

ガラスの壁そのものが、小刻みに震えていた。

西濱さんの一筆、一筆が真っ白い画面に刻まれるたびに、壁は震え、目は吸い込まれた。

これは明らかに、美などではない。

美しさなど思いもしなかった。そうではなく、ただ心が震え、一枚の絵、一輪の花、たった一つの花びらの中に命そのものを見ていた。

西濱さんの急激に膨らんでいく生命感が、画面の中に叩き付けられていく。筆致のことなどどうでもいい、ただ、その大きな空気が美以外のえたいの知れない感情を僕の中に呼び起こした。温度があり、揺さぶられ、そして何かを感じずにはいられなくなる。自分もこんなふうに何かを成すことができれば、という思いを掻き立てられてしまう。

僕はガラスの壁に貼り付いて、外の世界の西濱さんの水墨を食い入るように見ていた。

(4) 僕は感動していた。僕は感動に手が震えていた。

絵はあまりにも速く出来上がった。出来上がった絵は、千瑛や斉藤さ

んのもものよりも乱れ、写真のようではなかったが、それは牡丹^{ぼたん}よりも牡丹らしいものに見えた。

何がそう見せているのか。

形も何処か破綻^{はたん}していて、形よりも筆致のほうが強^{つよ}く表れている面と線の応酬^{おうしゅう}にどうして牡丹を感じるのか分からなかったが、その絵には、斉藤さんと千瑛の絵にはない圧倒的な存在感があった。

並べてみて、僕の目にはようやくそれが映った。湖山先生が、何が気に入らないのかもそのときに分かった。

「命だ。」

西濱さんの絵には命が描かれていた。

(砥上裕将「線は、僕を描く」による)

〔注〕好々爺^{こうこうや}——善良でやさしいおじいさん。

CG——「コンピュータグラフィックス」の略。コンピュータで

描かれた画像や図形。

翠山先生^{すいざん}——湖山先生と並ぶ水墨画の大家

〔問1〕⁽¹⁾ 千瑛はお茶を飲みながら熱くなった瞳を冷ましていた。とあるが、このときの千瑛の心情を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 湖山先生の無言の態度からその不機嫌さを察し、先生から絵の出来ばえを叱責されることを予感して身構えている。

イ 優れた技量をもつ斉藤さんでさえ湖山先生から評価されないのを見てほっとしたが、それを表に出さないようにしている。

ウ 斉藤さんの絵までが湖山先生から評価されず絶望的な気持ちになったので、小休止の間に冷静になろうとしている。

エ 斉藤さんと湖山先生の対立に不安を募らせていたところに、西濱さんが入ってくれたので、ひとまず安心している。

〔問2〕⁽²⁾ この沈黙に響く、なかなかいい音だった。とあるが、僕はなぜこのように思ったのか。その理由として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア お茶を飲むことで湖山先生に本来の優しさを取り戻してもらおうとする西濱さんに、心の細やかさを感じたから。

イ 絵の出来に無関心な西濱さんの様子に、今の自分たちのこだわりがつまらないものだ^とと教えられたような気がしたから。

ウ 気まずい雰囲気^{きまづいふんいき}を和らげようとして、意図的にその場にそぐわない態度を取った西濱さんに、尊敬の念を覚えたから。

エ 周囲の緊張が高まっていたが、それにもかまわず西濱さんがお茶を飲む音を聞いて場が和んだように思ったから。

〔問3〕⁽³⁾ それは場を締め上げるような苦しげな声だった。とあるが、このときの斉藤さんの心情を説明したものととして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 自分の絵の出来がよくないと承知しながらも、先生が何も言わないのでいたたまれないでいる。

イ 先生が自分の絵に厳しい評価をしながら、わざと話題をそらしていることに反発を感じている。

ウ 先生が自分の絵にどのような評価を下すのかわからないので、早く知りたいたとあせている。

エ 先生の厳しい評価を予想しながらも、まだ見込みがあるのではないかと望みをつないでいる。

〔問4〕⁽⁴⁾ 僕は感動していた。僕は感動に手が震えていた。とあるが、なぜ僕はこのように思ったのか。千瑛や斉藤さんの絵と対比しながら、五十文字以内で書け。

〔問5〕 本文の表現を説明したものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 複数の視点から描写することで、立場は違っても水墨画に懸ける思いは変わらないことが強調されている。

イ 会話を随所に用いることによって、僕が他の登場人物に対して様々な思いを抱いていることを印象付けている。

ウ 擬声語や比喩表現を効果的に用いることによって、水墨画を描く様子を読者にいきいきと感ぜさせている。

エ 湖山先生の表情を場面ごとに描き分けることで、水墨画に厳しい姿勢で臨む者の孤独が表現されている。

4

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

「伝え合い」において混乱を生じるのは、地理的な文化の違いからだけとは限らない。職種、年齢層による文化の違いから様々な行き違いは起きる。かつて、日本のマスメディアでは「新人類」^{*}という言葉が流行^ハった。それは、会社の新入社員などの言動が理解できないという人びとが急速に増えた時代であった。上司と顔を合わせた時の挨拶の仕方、上司に向かっての意見の言い方、仕事中的先輩に対する態度など、従来の社員の間で見られたものとは非常に異なるパターンをもつ若者が珍しくなくなったのである。

なぜ、そうした若者が多く出てくることになったのだろうか。日本の場合、マスメディアが送り出す過剰とも言える情報を通して、多様な生活文化や思想が無秩序に日常生活に流入し続けたことが、大きな要因として考えられるだろう。それらを素直に若い世代の者たちが受け入れた結果、価値観が非常に異なる人間が社会に混在し、共存するようになったのである。その一つの現れとして、かつては⁽¹⁾「世代間に見られた「伝え合い」のしきたりは無視され、若者が仲間に対するような態度で上司に接するとか、気のおもむくままに仕事をやりくりする若者が珍しくなくなり、それが従来型の一般的な価値観を共有していた多くの大人たちを困惑させることにつながったのである。」

現代の日本は、世代、地域、年齢、職業などに応じた行動のあり方をめぐる従来の文化的基盤に、大きな変化が生じている。

多文化、多価値とも言える状況下での「伝え合い」を考えるうえでは、次のような点に注意する必要があるだろう。たとえば、この地上のどこかに小さな島があつて、その社会は単一文化であるとしよう。その島の文化的共通基盤——便宜的に文化コードと呼ぶことにする——をより

詳しく見てみると、それは島民全員が共有する「言語コード」、「世代間の関係コード」、「道徳コード」、「同胞意識コード」、「歴史観コード」など、非常に多数の下位コードが溶けあつて構成されていることが分かる。そして、その島の人のびとの「伝え合い」は、すべて同じ文化コードに則^とつてなされているので、話者の行為は意図の通りに相手に的確に理解されることになるはずだ。

もちろん、実際にそのような完全に単一文化の社会は、この世に存在しないだろう。ただ、仮にそのような社会があると想定して日本の状況と比較してみると、日本で共有されているのは日本語という「言語コード」だけである。「道徳コード」は、昔ながらの人間の生き方にしがみついている者から、異次元世界に飛んでいってしまった者まで、非常に多様だ。「世代間の関係コード」についても同様に、心して年齢の上下にもとづく関係のあり方にしがついている者から、そのようなことはまるで問題にしない者までいる。その他のコードについても、多種多様の価値観をもつ人びとであふれている。こうなれば、同じ日本語で話していても、話者がそこにこめている意味が、そのまま相手に伝わるとは限らない。逆に、下手に「ことば」が通じ、「同じ日本人」という思いこみがあるからこそ、誤解が生じることに戸惑いや腹立ちを覚える人もいる。「ことばを通じて意味通ぜず」²⁾。それが日本のような多重文化社会の現状なのである。

異なる文化をもつ人びとの共存ということは、「異文化」間の接触という話題と重なりあう。日本でも、近年、異国から来ている人びとが身近な所で働く姿を見かけることは普通になった。また、同じ日本人でも、価値観が非常に異なった人びとが自分の周囲で生活している。誰しもが、日常生活のなかで、そうした様々な異文化との接触をもつことが、好むにせよ、好まないにせよ、避けがたい時代となったのだ。

確かに、「伝え合い」について単一の文化コードのみを想定して語る

試みは、問題点をすっきりとわかりやすくしてくれる。たとえば、この動作はこういう意味だ、と語れることは、それを行なう当人も、それを受けとる相手も、単一の文化コードを共有しているということが前提となっている。しかし、現実にはそれほど単純にパターン化して語ることができるものではない。文化コードが異なる状況での「伝え合い」は難しい。自分の言動を受けとる相手の文化コードによって、常に、自分がその言動にこめた意味と、相手が受けとる意味との間にズレが避けがたいからである。

³⁾「ことば」がよく通じない、あるいは、まったくの異文化であると分かる人を相手にする方が、むしろ対処しやすい。文化コードが異なるということが互いにつかみやすいからだ。逆に、同じ言語が通じる相手の方が、誤解の原因を探ることは難しい。まず、文化コードが違うということに思いが至らないことがある。さらに、相手の文化コードのどの部分が自分と異なっているのかを理解することは、それほど容易なことではない。一例をあげれば、自分の周辺で生活している人びとの中に、「あの人は保守的だ」と皆から言われる人物がいるとしよう。しかし、その人物が、文化のどのような面においてどのように保守的なのかといった具体的なことになる、その評価から他の人が思い浮かべることはまちまちである。だからこそ、「ことばを通じて意味通ぜず」なのである。

日常生活における異文化間での「伝え合い」の話題は、二つの国を代表する外務大臣の間での公的な会談のように、立場とする根柢の枠組みがしっかりしたものではない。文化が異なるという話題は、二つ以上の文化には明確な境界線が引けるかのような印象を与えるが、それらは現実には連続体としてのみ見られるものである。異文化間の線は、話題を展開する際に、言語の単語というものに依存せざるをえないがために生じる、一種の錯覚であるに過ぎない。

たとえば、日本文化とアメリカ文化というのは、その間を分ける明確

な境界線があるわけではなく、いわば概念上での便宜的な区切りなのである。現実の文化の問題は、物理的に正確に線引きできるものではない。現実の人びとは様々だ。文化に見られる違いは「この種の人びとには、このようなことについて、このような強い傾向^レが見られる」といった形でのみ、指摘できるものである。このことなしに「異文化」の話題を展開すれば、各地域の人びとのあり方を単純にステレオタイプ化し、それらを羅列するだけのものとなりかねない。

異文化間の接触に見られる基本的な型としては、まず、相互に及ぼす影響がほとんど見られない例がある。たとえば、日本でも一昔前には、同じ地域に居住していても、その住民とは用足し程度のつきあいしかない外国人がいたものであった。そうした人びとの中には、十数年もその土地に暮らしていながら、土地の言語も片言しか話そうとせず、近所で買い物をする以外のつきあいをもとうとしない者もいた。彼らは異文化の中に住みながらも、異文化とはほとんど接触をもつことなしに、生活が成り立っていたのである。

次に、接触している相手の側の文化に強い影響を受ける例がある。その場合は、⁽⁴⁾異なる文化から積極的に異なる文化コードを受け入れることで、人びとは相手の価値観にあわせて「伝え合い」を試みる努力をする。その逆の例は、片方の文化に属する人びとが相手の側の人びとに自分たちの価値観を強要する場合である。

そして最後に見られるのが、両者が相互にある程度ずつ影響を及ぼしあう場合となるであろう。

また、そうした異文化接触を通して、接触した文化とは異なる新しい文化が生まれてくる場合もある。中でも、わたしが大きな関心をよせてきたのが、主に大航海時代以降、故郷から遠く離れた未知の土地に送りこまれ、母語や伝統を奪われた人びとが、言語も文化も異にする人びとと接触する中で、わずか数世代のうちに創りあげた新しい言語である。

そうした言語は世界各地に見られるが、ピジン・クレオール諸語と総称される。

わたしがクレオールという言葉と最初に出会ってから、すでに半世紀近い年月が流れた。その間、アフリカ、インド洋、カリブ海域、南北アメリカ、太平洋諸島など、クレオール語のフィールドワークで訪れた土地は、多様な集団の多様な文化がひしめく場所でもあった。

そうした土地では、たとえ同じ言語を話したとしても、「ことば通じて意味通ぜず」といった事態が避けがたい。だからこそ、「伝え合い」において「ことば」が果たす役割や相手との文化的基盤の違いについて、人びとは否応^{いやぢ}なしに自覚的にならざるをえないようだ。

⁽⁵⁾ わたしは、そこに、異文化の接触、多重文化社会など、現代の「伝え合い」を考えるうえで、重要な縮図となる場所があるように感じている。(西江雅之「ことばだけでは伝わらない コミュニケーションの文化人類学」による)

〔注〕 マスメディア——報道・伝達のなかたちとなるもの。新聞・テレビ・ラジオなど。

新人類——一九八〇年代に若者に対して付けられた呼称。

コード——決まり。規準。

ステレオタイプ——型にはめて考えること。

大航海時代——一五〜一六世紀にヨーロッパ人がインド航路やア

メリカ大陸への到達を成し遂げた時代。

フィールドワーク——野外調査。

〔問1〕⁽¹⁾ 世代間に見られた「伝え合い」のしきたりとはどのようなものか。
次のうちから最も適切なものを選び。

ア 上の世代の人の考えは絶対的なものであり、下の世代の人は自分なりの意見があるとしても表明してはならない。

イ 上の世代の人が親しげに接してきても、下の世代の人は対等であるかのような言動を慎まなければならない。

ウ 上の世代の人は下の世代の人を指導する立場として、自分たちの世代の文化を伝えるように努めなければならない。

エ 上の世代の人は集団の結束を図るため、下の世代の人が価値観を共有できるように育成しなければならない。

〔問2〕⁽²⁾ 日本のような多重文化社会の現状とあるが、どういうことか。
五十文字以内で答えよ。

〔問3〕⁽³⁾ 「ことば」がよく通じない、あるいは、まったくの異文化であると分かる人を相手にする方が、むしろ対処しやすい。のはなぜか。
次のうちから最も適切なものを選び。

ア 文化コードが異なるという前提に立ち、お互いの言動に込めた意味と相手が受け取る意味のズレによって誤解が生じないように慎重になるから。

イ 初めから「言語コード」が違っていると分かるため、辞書などで外国語と自国語の意味を照らし合わせながら、正確な意味を確認しようとするから。

ウ 「ことば」が通じないと分かっているならば、こちらの文化コードを相手に伝えることで、一つの「言語コード」を共有できるようにするから。

エ 全くの異文化である相手とは、文化コードがあまりにも違いすぎるため、何をしても「伝え合い」は無理だということが最初から分かるから。

〔問4〕⁽⁴⁾ 異なる文化から積極的に異なる文化コードを受け入れることで、人びとは相手の価値観にあわせて「伝え合い」を試みる努力をする。とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 異なる文化を熟知して、自分たちの文化の優れている点を明確にしようとする。

イ 異なる文化に対して、自分たちの価値観に合うものを取捨選択しようとする。

ウ 相手の文化を積極的に取り入れる姿勢を見せて、信頼関係を築こうとする。

エ 相手の文化を全面的に取り入れて、その価値観を共通の基盤にしようとする。

〔問5〕⁽⁵⁾ わたしは、そこに、異文化の接触、多重文化社会など、現代の「伝え合い」を考えるうえで、重要な縮図となる場所があるように感じている。とあるが、異なる文化が混在する現代において、我々は他者とのように関わるべきだとあなたは考えるか。例を一つあげながら二百四十文字以内で書け。なお、や・や「などのほか、書き出しや改行の際の空欄もそれぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、本文中に引用された古文の後の〔 〕内の文章は、現代語訳である。（＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

『枕草子』の中には何とも「都」的とは思われぬ印象を呈した描写が、少なからず見出し得るのである。

たとえば夕焼け空を、ねぐらへと帰る鳥の添景〔「春は曙」〕。また蠅にとまられた時の、肌につたわるひやりと湿った脚の触感の描写〔「虫は」〕。

これらのように野性むき出しの素材、即物的すぎる景物などは普通、優美の感覚には相容れられぬものとして、文学作品の中から排除されてきた。この作品の素材の選び方はそういう点できわめて特異であり、「雅」のあり様に反する本質を備えている。

そうして中でも最も注意されるのは、海の眺めとそこに生きる人々の暮らしを描く次のような条りである。

わが乗りたるは、きよげに造り、妻戸あけ、格子上げなどして、さ、水とひとしうをりげになどあらねば、ただ家の小さきにてあり。異舟を見やるこそ、いみじけれ。遠きはまことに、笹の葉を作りてうち散らしたるにこそ、いとよう似たれ。とまりたる所にて、舟ごとにともしたる火は、またいとをかしう見ゆ。――略――

海はなほいとゆゆしと思ふに、まいて、海女の潜きしに入るは、憂きわざなり。腰に付きたる緒の絶えもしなば、いかにせむとならむ。

A

私の乗っている船はきちんとした造りで、船室の戸や窓をあけた状態にして、水面よりは高い位置に見えるので、船全体はまるで小

さい家のようなだ。他の船を眺めると心細い感じがする。遠くのは笹の葉を（船に作って）水面にまき散らしたのにそっくりだ。（夜間）船ごとにともした灯はこれまた実にいい眺めだ。――略――

海はやはりとても恐ろしいと思うにつけても、なおのこと海女が魚を捕りに海に入るのは、つらい仕事だ。腰につないだ綱が切れたりしたらどうするのだろう。

これを見ると、自分たちの乗る立派な大型の船と漁民たちの木の葉のような舟との対比や、海女の潜水の様の細やかな描写など、実体験なしにはとうてい無理なほどに、活き活きと描かれていることが解る。それも決して、都からほど近い浦における舟遊びなどという一回的な体験ではあるまい。幾日も船上で生活した旅人ならではの、海に対する憧れと畏怖とがなймаぜになった思いが底流している。おそらくは下向時に初めて海を見た折の驚嘆と、上京する船路での体験や感慨とを、織り交ぜてものした記述であつたに相違ない。

ところで海路の旅を描く先例としては『土佐日記』があまりにも有名であろう。それと比較するならば、『枕草子』の特異性はいつそう明らかになるう。たとえば、

卯の時ばかりに船出だす。みな人々の船出づ。これを見れば、春の海に秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。

朝六時頃に船を出す。他の人々の船もみな出航する。これを見ると、まるで春の海に秋の木の葉が散ったようである。

船出の景と海上風景とが描き出されるが、「春・秋」という言葉の対照によって構成されている点は重要である。次々に港から出ていく種々多様な船の群れを、あとからあとから水面に散り浮かぶ木の葉によって

喩えている。だが船を木の葉と見るためには、対象と視点人物との間にかかなりの距離が必要とされるはずである。

『枕草子』の[]の比喩は、確かに他の舟を遠望しての表現なのだが、『土佐』の場合は見ているはずの作者の船も、出港していく船群の一隻に他ならないから、この表現は実景を写したものではないと言える。いったん視点をはるかな遠方に据えて、船出の様々な木の葉の散り浮かぶ様ととらえ、それを春・秋の対比の上に構成した、観念的な表現なのである。

つまり⁽²⁾風景の美しさは、一度詩歌の様式において位置づけられてから、再び眺望の上に還元されるという複雑な手順を追って、掬い取られるのである。まさに「自然が芸術を模倣する」ような美的認識の有り様がそれが都人たちの感動の回路なのであった。

翻^{ひるがえ}って『枕草子』の描く海に眼を転ずれば、その描写がきわめて即物的であり、かつそのモチーフ^{*}があまりにも和歌的でないということに、改めて気づかされることであろう。ところが船に灯をともした眺めの描写（「とまりたる所にて」）に続いて、次のごとき一節があり、そこで和歌の引用されている点に注目したのである。

はし舟とつけて、いみじう小さきに乗りて漕ぎありくつとめてなど、いとあはれなり。「あとの白波」は、まことにこそ消えもていけ。

はし船と名付けた、たいそう小さい船に乗って、漕ぎ回る早朝などは、実にしみじみとした感がある。古歌によまれた「あとの白波」とは、まったくその通りで、すぐに消えてしまう。

「あとの白波」とは、拾遺集第二十に採られた有名な沙弥満誓の古歌

世の中を何にたとへむ朝ばらけ漕ぎ行く舟のあとの白波

この無常な世の中をいったい何にたとえようか。夜明け方に漕ぎ出していった、船のあとに立った白波とでも言おうか。

の第五句を引いたもの。一首は、早朝のまだほの暗い海を漕ぎ渡る舟の航跡によそえて、そのようにあとはかなく消えていく人の世の定めを嘆いている。つまり「あとの白波」というのは、あくまでも世の中の常無^{ことわりかた}き理を象^さるためのものなのである。

『枕草子』は、ひどく小さい舟に乗って早朝の海を漕いでいく、不安げな様を言い表すのに、くだんの古歌を引いたわけである。するとともに一首では、無常を象徴する素材にすぎなかったはずの「あとの白波」が、ここでは完^まき現実感^{まじ}を具^{そな}えて、次第に消えていく航跡そのものを表すものへと転換していく。

換言すれば事物を抽象化することで、その実体性を希薄にさせて、喜怒哀楽の感情や人生観を重ねていく和歌の表現に対し、『枕草子』は⁽³⁾和歌の言葉を現実の事物の上に引き戻すのである。いったん和歌の秩序の中に囲い込まれた「物」を、再び実体として解き放ち、生々しい活力を還元させる表現。それこそが『枕草子』の試みだったのではないか。言わばそれは、和歌という秩序の枷^{かせ}からの解放であり、⁽⁴⁾「雅」の論理とは相容れぬ指向性を持った、生々しくむき出しの「物」たちの世界、野性の瑞々^{みずみず}しさに満ちた自然の世界への回帰であった。

（藤本宗利「感性のきらめき 清少納言」による）

〔注〕 下向——都から地方へ行くこと。

モチーフ——作品の題材。

拾遺集——拾遺和歌集のこと。平安時代の歌集。

沙弥満誓——飛鳥時代から奈良時代にかけての歌人。

くだんの——前に述べた。

〔問1〕 ⁽¹⁾ ものしたの意味として最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 析った

イ 議論した

ウ 所有した

エ 表現した

〔問2〕 に入る語を現代語訳Aから三字で抜き出せ。

〔問3〕 ⁽²⁾ 風景の美しさは、一度詩歌の様式において位置づけられてから、

再び眺望の上に還元されるといふ複雑な手順を追って、掬い取られるのである。とあるが、ここでの「詩歌の様式」とは具体的にはどのようなことか。文中から六字で抜き出せ。

〔問4〕 ⁽³⁾ 和歌の言葉を現実の事物の上に引き戻すとはどういうことか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 和歌の言葉で現実の事物を表現することで、散文でありながら詩歌としての芸術性をそなえたということ。

イ 自分が目にした風景が取るに足りないものであっても、古歌の風景と重ねることによって印象深くしているということ。

ウ 和歌に用いられている観念的な言葉によって、自分が体験している風景とその心情を表現しているということ。

エ 和歌の伝統的な表現の中に斬新な言葉を取り入れることで、これまでにない表現の可能性を開くということ。

〔問5〕 ⁽⁴⁾ 「雅」の論理とはどういうことか。最も適切なものを次のうちから選べ。

ア 優美なものは都人の価値観の中に存在するので、都にないものは芸術の対象にならないという考え。

イ 優美なものが芸術の対象であり、現実の事物から生々しさを排除して初めて作品の素材になり得るという考え。

ウ 芸術をになうことができるのは才能に恵まれた者だけであり、それ以外の者には歌など理解できないという考え。

エ どのような事物であっても、喜怒哀楽の感情や人生観を重ねなければ芸術作品とは言えないという考え。

2	
(1) ジ (しで)	持 して
(2) ヨネン	余念
(3) キョシュウ	去就
(4) ボツカテキ	牧歌的
(5) リガイトクシツ	利害得失

各2点

1	
(1) 研 (ぎ)	と ぎ
(2) 血 眼	ちまなこ
(3) 鼓 吹	こすい
(4) 助 太刀	すけだち
(5) 順 風満帆	じゅんぷうまんぱん

各2点